火

横光利一

一

初秋の夜で、雌（めす）のスイトが縁側（えんがわ）の敷居（しきい）の溝の中でゆるく触角を動かしていた。針仕事をしている母の前で長火鉢（ながひばち）にもたれている子は頭をだんだんと垂れた。鉄壜（てつびん）の手に触れかかると半分眼を開けて急いで頭を上げた。

「もうお寝。」

母は縫目（ぬいめ）をくけながら子を見てそういった。子は黙って眼を大きく開けると再び鉄壜の蓋（ふた）の取手（とって）を指で廻し始めた。母はまたいった。

「明日また遅れると先生に叱られるえ。」
子はやはり黙っていた。そして長らくして、
「眠(ねむ)たいわア。」といった。
「そうやでお眠(ねむり)っていうのやないの。」
「いやや。」
「お可(か)しい子やな、早(は)ようお眠んかいな。」
子は立上って母の肩の上へ負われるようにのしかかると、暫(しばら)く静(しずか)にしていたが、その中(うち)に両足で畳を蹴(け)り飛び上った。母は前へ蹲(かが)むようにして「重たいがな、これ、針でつくえ。」肩の子を見向きながらいった。子は再び静になった。

「ええ、お母(か)さん、眠たいわア。」

「そやでお眠たらええやないか、重たい重たい。」

子は「いやーや」というと母の肩から辷(すべ)り下(お)りて膝(ひざ)の上へ顔を埋めた。

「あぶないがな、針が刺(ささ)っているやないか。」

母は膝の上の布切(きれ)を前の方へ押しやった。子の頭の頂(いただき)から首条(くびすじ)へかけて片手で撫(な)で下(お)ろしながら低い声で、

「ほんとにもうお寝、え。」といった。

「お母さんも寝ないや。」

「人が笑うわ、九つもなってるくせに一人で寝んな

んて。」そして母は些(ち)っと黙っていたが、「お前の頭はほんとうにええ格好や。」と呟(つぶや)いた。

母も子も黙っていた。隣家から酒気を含んだ高声(たかごえ)が聞えて来た。子は夕暮前に、井戸傍(いどばた)で隣家の主人が鶏(とり)をつぶしていたのを眼に浮べた。

「お母さん、お隣りのはな、鶏を食べていやはるのや。」と子は母を見上げていった。

「そんな事をいうものやない。」と母はいった。隣家の裏庭の重い障子(しょうじ)の開く音がすると、縁側の処(ところ)へ近所の兼助(かねすけ)という男が赤い顔をして立っていた。

「お里(さと)さん、御馳走(ごっそ)だすぜ、さアお出(い)でやす。」そう

男がいって子供を抱く時のように両手を出して一度振るとひょろひょろとした。

母は微笑(わら)って「え、大きに。」といった。

「さア、早ようやなけりゃ駄目(いけ)まへんぜ。」

「この子がいますで後ほどまたおよばれしますわ。」と母はいった。

「何アに、米(よね)さんは一人寝せときゃええさ、なア米さん、独人(ひと)り寝てるわのう。」と男は顔を少し突き出した。

子は男から顔をそむけて黙って母の顔を見上げた。

「お前ひとり寝てる？」と母は訊(き)いた。

子は顔を横に振った。

「あんなにいうておくれはるのやで、お前ひとり寝てな、え、直(じ)きにお母さんが帰って来るで。」

「好(え)えさ好えさ、赤子(あかご)じゃあるまいし。」そういうと男は「どっこいしょ。」と背後へ反(そ)り返(かえ)った。母は子の頭を膝から起して「待っておい。」といって笑いながら縁側の方へ立った。そして「下駄(げた)がないわ。」と呟いた。

「下駄のような物入(い)るものか。」

と男はいうと彼女の手首を摑(つか)まえて背を向けると両手で彼女の足を抱いて歩き出した。母は男の背の上で「険(あぶな)い険い。」と笑い声でいった。

子は縁側へ走り凭って戸袋からのり出した。すると男の背上で両足をかかえられている母が隣家の庭の真中でひょろひょろしているのを見た。子は男が憎くてならなかった。そして母が非常に悪いことをしているような気がした。

「丁度好えぞ、兼さん。」

赤い顔をした隣家の主人がそういって笑うと、傍の主婦は脱けた前歯を手で隠すようにして淡笑いをした。

子は室へは入って障子の片端を胸に押しつけると、指を舐めてぷすぷすと幾つも障子に穴をあけた。もう眠たくなかった。

暫くして子は戸袋の処からまた隣家の庭をソッと覗(のぞ)いた。母が兼の横に坐って銚子(ちょうし)を捧(ささ)げるようにしているのが見えた。子はもう母が自分の方を向くだろうと思ってその方を長らく見ていた。母は銚子を持ったまま何か話している主人の顔を見続けていた。そして時々顎(あご)を動かした。しかし何時(いつ)までたっても子の方を向かなかった。

子は悲しくなった。で、顔を戸袋からひっこめて「お母さん。」と呼んだ。

「はいはい。」

そう母はいった。ほど経(へ)て母が何かいって帰ってく

るらしいけはいがしたので子は火鉢(ひばち)の傍へ走り込んだ。

母は眼の縁(ふち)を少し赤くして帰って来ると、

「まだ眠てやないの。」と微笑っていった。子は黙って母の手を引張って叩(たた)いた。

「さアもう寝な。また明日学校が遅れるえ。」

子は口を尖(と)がらせて母の手の指を咬(か)んだ。母は「痛ッ」といって手を引っこめた、そして些(ちょ)っと指頭(ゆびさき)を眺めてから「まアこの子ったら。」といった。子は黙って母を睥(にら)んでいた。そして、「お母さんの阿呆(あほ)。」というと母の手を摑んでもう一度咬もうとした。母は子の背中を押すようにして「此処(ここ)をかたづけたら直ぐ寝る

でなお前は前へ寝てなえ、ほんとにお前は賢いえ。」そういうと子を寝床の方へ連れて行った。

二

その日は刺繍の先生の市から村へ廻って来るのが遅れていた。

米の母は、六年前にアメリカへ行った良人から病気という報せを受けとって以来半年余り送金が絶えているにもかかわらず、まだ刺繍を習っているということについて、親戚側からとやかくいわれた。しかし彼女

は、少々の金を費(ついや)してもこれさえ覚えておけばまさかの時に役立つといって習い続けた。

　刺繍の先生は遠い市から月に一回欠(かか)さず村へ廻って来た。米の村では母だけが刺繍を習っていた。これを習う最初にあたって先ず、何処(どこ)でも、その習う期間は先生を自分の家に宿泊させる約束をしなければならなかった。米の家でもその約束を守っていた。初めのほどは、十五になった米の姉と母とが習っていた。しかし、父から送金が絶えると共に母は娘を看護婦の見習生(みならいせい)として市へやって自分独り習い続けることにした。

米はその時から自分の家が非常に貧しくなったのだと知った。しかし、何処が前よりも貧しくなったのかは分らなかった。また、ただ、姉が彼と一緒の家にいないという事以外に生活の様子は前とは少しも変っていなかった。

　米は姉に逢(あ)いたいと思った。殊に二人が喧嘩(けんか)した時のことを想い出すと溜(たま)らなく逢いたくなった。しかし彼は姉へ手紙を出す時、かばんと小刀(こがたな)とを帰りに買って来てくれとは必ず忘れずにいつも書いたが、逢いたくてならぬとか、早く帰ってくれとかは決して書かなかった。というのは、自分の愛情を現すことを羞(はずか)し

く思いもしたし、また、そのことを母に見られるのをきまり悪く思ったからでもあった。

三

学校の門を出る時、米は白墨を拾った。帰る途々（みちみち）、彼は何処か楽書（らくがき）をするに都合の好さそうな処をと捜しながら歩いた。土蔵（どぞう）の墨壁は一番魅力を持っていた。けれども余り綺麗（きれい）な壁であると一寸（いっすん）ほどの線を引いて満足しておいた。

村端まで来て、道の片側に沿って流れている小川に

かかった御陰石(みかげいし)の橋を見た時、米は此処が最も楽書するのに適していると思った。そして最初に滑(なめら)かそうな処を撰(えら)んで本という字を懸命に書いてみた。草履(ぞうり)は拭物(ふきもの)の代りをした。彼は短い白墨が磨(す)り減(へ)って来ると上目(うわめ)をつかって、暫く空を見ていてから

「カネサント、オカサントユウベ」

と書いた。彼はその次を書かなかった。なぜかというと昨夜眼を醒(さま)した時、真暗な自分の横で母と男とが低い声で話していたのはもしかしたなら夢であったのかもしれぬと思ったから。しかし、男の堅い手がそっと自分の手を強く圧(おさ)えて直ぐひっこめたのは確(たしか)に夢で

はなかったと思った。そして、彼はそれ以外に何も記憶になかった。

彼は立ち上って石橋の上から去ろうとした、が、十歩ほど行くと後へ戻って橋の上の字を草履で消した。そしてもう一度書いてみたけれどもやはり消した。後はぶらぶら歩き出すと急に走り出した。走り出ると反（そ）り返（かえ）って白墨を高く頭の上へ投げて踏（ふ）み潰（つぶ）した。そしてまたぶらぶら五、六歩あるくと走り出した。

村へは入った処で染物屋（そめものや）があった。米はそこの雨垂落（あまだれおち）に溜っている美しい砂を見ると蹲（しゃが）み込（こ）んでそれを両手で掬（すく）ってはばらばら落してみた。終（つ）いには両

足を投げ出した。そして、大きな砂粒をかき去(の)けると人差指でオカサンハ、と書いた。もう昨夜の事は夢だとは思えなかった。急に母を擲(なぐ)りつけたくなった。その時彼は砂の中に透明な桃色をしたゴマの砂粒を見付けた、彼はそれを手の平で拭(ふ)いてよく眺めていると何か貴い石にちがいないと思った。

「金剛石(ダイヤモンド)や！」

フと彼はそう思うとほんとうの金剛石のような気がした。するといよいよ金剛石だと思われた。彼はそれをすかして見てからもとあった砂の上へ置いてみた。しかし、暫く見詰(みつ)めていると外(ほか)の砂と入り交って分ら

なくなりそうになったので直（いそ）いでまた取り上げた。眼が些っと痛かった。

彼はだんだん嬉しくなって来た。小刀が買える、カバンが買える、とそう思った。が、直ぐその後に姉のことを思い浮べると、小刀もカバンも飛び去って、ただこの金剛石を持っているということばかりで姉が家へ帰って来られるような気がして来た。もうじっとしていられなかった。

そこへ米より三つ上の辰（たつ）という子が帰って来た。

「金剛石やぞ、これ。」

米は些っと砂粒を差し出すと直ぐ背後へ廻した。

「嘘(うそ)いえ。」と辰はいった。

米は金剛石を見せずにはいられなかった。

辰はその砂粒を取ると暫く眺めていて

「こんな金剛石あるか。」

といった。そして、不意に半分手を差し出している米の傍から、駆(か)け出(だ)した。米は、三、四間(けん)後を追いかけたが急に真蒼(まっさお)な顔をして走り止まると大声で泣いた。辰は米を見返って溝の中へ捨てる真似をして道傍(みちばた)の材木の上へ金剛石を乗せて、赤目を一度してそのまま帰った。

米は辰の姿が見えなくなると徐々(そろそろ)材木の方へ歩いて

行った。金剛石は材木の浅い割目の中で二重に見えていた。彼はそれを掌（てのひら）の上へ乗せると笑えて来た。

家へ帰ると彼は中へは入らずに直ぐ裏へ廻って、流し元の水を受ける槽（おけ）を埋めた水溜（みずため）の縁の湿っぽい土の中へ金剛石を浅くいけた。そこには葉蘭（はらん）が沢山生（は）えていたので、その一本の茎を中心に小さい円を描いておいた。彼は、こうしておけば直きに金剛石が大きくなるにちがいないと思われた。それに此処は水をやらなくてもいいと思った。

四

その夕方、米は昨日見付けた柏(かしわ)の根株(ねかぶ)の蜂の巣を遂に叩(たた)き壊(こわ)して帰って来た。そこへ母が奥から出て来て魚屋の通帳を彼に渡して牛肉の罐詰(かんづめ)を買って来いと命じた。米は母の顔が少し赤いと思った。そして外へ出る時庭に見馴(みな)れない綺麗な下駄を一足見付けた。彼は畳のような下駄だと思って履(は)こうとすると、母は「これ。」と顎を引いた。

米の家と魚屋とは親戚であったし、馴れていた。それでそこの魚屋の主人は米は障子を開ける前に、きっと叔父(おじ)さんは常日(いつ)ものように笑っているだろうと思っ

て覗いて見たが、独人(ひと)りで恐い顔をして庭の同じ処を見詰めていた。米は今日は膝の上へ乗れないと思ったが、障子を開けると直ぐ叔父はニコニコした。

「鑵詰、牛肉のや今日は。」

米がそういうと叔父は笑いながら立って鑵詰棚へ手を延ばして「どうしたのや、先生が来たんやな。」といった。

米は家の庭にあった畳のような下駄は刺繍の先生のだなと思った。「どうや知らん。」と答えた。

叔父は鑵詰の口を開けながら風呂(ふろ)へ入れてやろうかといった。米は「やめや。」といった。すると叔父は突

然、「どうや米、お前先生とお父つァんとどっちが好きや、うん。」と訊いた。

「知らんわい。」

米は仰向きになった叔父の膝の上へ寝そべってそういった、そして叔父の鼻の孔は何ぜ黒いのだろうと考えた。

「知らん、阿呆なこといえ、お父つァんはもう嫁さん貰うてござるぞ、どうする、ん？」と叔父は覗き込んだ。

米は腹を波形に動かして「ちがうわい、ちがうわい。」といった。しかし叔父のいう事は真実のように思われ

て、もう父は帰って来ないような気がして来た。母とさえ一緒にいる事が出来れば父の帰って来る来ないはそう心にかからなかった。すると、黙って叔父の手の皮膚を摘まみ上げていた彼は急に母が昨夜男と寝た事を自分が知っているのを気使って自分の留守に死んでいはすまいかと思われた。その中に涙が出て来た。で、草履を周章てていて黙って帰ろうとすると、叔父は「何んじゃ米。」といった。けれど彼はやはり黙って表へ出ると馳け出した。

家へ帰った時母は鑵詰を米から受け取って「お前まアこの間着返えた着物やないか。」

と睨んだ。彼の着物の胸から腹へかけて鑵詰の汁が飛白の白い部分を汚していた。

　母が自分を見たなら抱いてくれるとばかり思っていた米は何ぜだか急に他家の母の傍にいるような気がした。そして、身体をあちこちに廻しながら物を踏み蹂るような格好をして母を見い見い外へ出て行こうとした。「通いは？」と母が訊いた。米は忘れて来たのを知ったが悲しくなって来たので黙って表へ出た。しかし、直ぐ金剛石のことを思い出すと裏へ廻って行って、夕闇の迫った葉蘭の傍へ蹲って、昼間描いておいた小さい円の上を指で些っと圧えてみた。すると、間も

なく、姉が帰って来て、家の者らがちりちりに生活しなくてもいいようになると思われた。しかし金剛石ではないと思うと金剛石ではないような気がして淋しくなった。

　外が真暗（まっくら）になってから家の中へ入った。やはり来ていたのは刺繍の先生であった。米のその夜の夕餉（ゆうげ）の様は常日とは変っていた。餉台（ちゃぶだい）は奥の間へ持って行かれたし、母が先生の傍（そば）へつききりなので彼は台所の畳の上で独人（ひとり）あてがわれた冷（ひ）やっこい方の御飯をよそって食べ始めた。初めの裡（うち）は牛肉を食べたかったので、母が持って来てくれるまでに御飯を食べてしまわない

ようと少しずつ遅くかかって食べ出したが、何日(いつ)の間(ま)にかお腹が膨(ふく)れて来た。

彼が食べ終った頃、母が奥から米の傍へ皿を取りに出て来た。

「お漬物(ここ)は。」と米は訊(たず)ねた。

「うむ？　うむ。」と母はいった。

「お漬物(ここ)何処(どこ)、お母さん。」と少し米が大きな声を出すと母は「はいはい、今あげますよ。」といって奥へ行った。しかし幾ら待っても母は出て来なかった。その中(うち)に米はもう漬物(つけもの)の事を忘れてしまって箸(はし)のさきを濡らしては板の間へせっせと兵隊の画を描き初めた。どう

してこう幾度画いても帽子（ぼうし）が小さくなるのだろうと苦しんだ。

奥から餉台や汚れた食器が台所へ帰って来た。鑵詰の牛肉はもう皿の上から消えていた。米は牛肉をどうしたかと母に訊ねたかったが、そのことを奥の客に聞かれては羞（はず）かしいと思った。そして、間もなく母は再び客に奪われた。

米はあきらめて黙って紙石盤（かみせきばん）を出して来ると腹這（はらば）いになって画をかき始めた。一頁に一つずつ先ず前の軍人から始めて二枚目に糞（くそ）を落している馬を描いた。しかし、馬の尾を高く上げていいかどうかと迷わされた。

そして、結局、細い勢の好い滝のような曲った尾を付けて納得した。次には姉の顔を画いた。下頰（したほお）の膨らんだ円い輪廓（りんかく）を幾度も画き直してから眼鼻をつけて最後に鼻柱の真中へ黒子（ほくろ）を一つ打った。そうして出来上った南瓜（かぼちゃ）のような顔の横へ「ネーサンノカオ」と書いておいた。その顔を眺めていると、姉の黒子は黒いが画の方は白いと気が付いた。そして、それを黒くすると姉の顔に一層似つかわしくなるであろうと考えたけれどどうすれば黒くなるかという方法が分らなかったのでそのままにしておいた。

九時が打つともう米は眠たくなった。奥から母の笑

い声が聞えて来た。いつも奥で寝ている彼は、今夜は何処で寝て好いのか知らなかった。すると、また、昨夜眠を醒した時の母と男との囁（ささや）きを思い出した。そして、学校の帰り道に石橋の上へ書いた楽書（らくがき）を消したかどうかと気がかりになって来た。それは消したようでもあるし消さないようにも思われた。

　母が奥から出て来たとき、

「何処で寝るの。」

と米は訊いた。

「アそうそ、お前もう眠な。」

　母はそういうと直ぐ奥へ引き返して行った。そして

奥の間で「些っと失礼します。」といって蒲団を米の横へ持って出て来てから、楕円形の提灯に火を照けた。蠟燭は四寸ほどもあった。

「お前提灯持って二階へお上り。」

と母はいった。子が階段を昇ると母はその後から蒲団を擁えて昇った。

母が蒲団を敷いている間、子は灯が消えないように提灯をさげていた。「お母さんも寝な恐わい。」と子はいった。

「直ぐ来るえ。直っきや。」と母はいった。子はそれきり何ともいわなかった。母は梯子の中頃まで降りる

と「寝る時灯を消しな、え。」といった。子は「うん。」といって灯のついたままの提灯を畳んで枕もとに置いてから、母について降りた。そして鉢へ冷めた鉄壜の湯をいっぱい注いで、それを再び二階へ持って来て枕元の提灯の傍へおいた。寝巻を着返えて蒲団の中へは入ると子は俯伏せになって、川の水でも飲むような格好で一口鉢の湯を呑んだ。それから、母と自分との蒲団の領分を定めようと思って母の木枕を捜したが見あたらなかった。で、身体を蒲団の片方へよせてまた鉢の湯を一口呑んだ。そして彼は額を枕にあてると母の笑い声が下から聞えて来た。何時母は寝に来るのか

しらと思ったが母の来るまで楽しみに一口ずつ長らくかかって鉢の湯を減らそうと心に決めた。湯は三口目に一分（ぶ）ほど減った。しかし四口目の頭は何時までたっても枕の上から上らなかった。

　その夜の一時過ぎに子は眼が醒めた。すると、寝巻を着た母が蒲団の上に坐って彼をしっかりと抱いているのを知った。母の背後にはランプを持った刺繍の先生が黙って立っていた。あたりに煙が籠（こも）っていた。そして、真黒に焼けて輪をはじけさせている提灯を中心に、枕元の畳の焦げた黒い部分が子の寝ていた枕の直

ぐ傍で拡がって来ていた。鉢は焼け残った子の着物の上にひっくり返っていた。子は瞑りかけた眼で焦げた畳を眺めていた。そして首を些っと横に振ると、母の拡がっている襟もとへ顔を擦りつけるようにしてかすれた声で

「早よう眠よう。」

といってまた眼を閉じた。母は黙っていた。その中に彼女の眼が潤んで来た。

「ランプはもう要りませんか。」

と先生がいった。母はやはり黙って少し前へ身体を動かした。

先生も黙って下へ降りて行った。室（へや）の中が暗くなると、母は子を一層強くだいた。そして長らくして、

「虫が報（し）らせたのやわ。」

と小さい声で呟（つぶや）いた。子はもういびきを立てていた。

底本：岩波文庫「日輪　春は馬車に乗って　他八篇」
岩波書店
１９８１（昭和56）年８月17日第１刷
１９９７（平成９）年５月15日第23刷
入力：大野晋
校正：田尻幹二
ファイル作成：野口英司
１９９９年7月９日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。